

き時期がきた、と述べる。この裁判問題については本書第7章で Steve Heder が1990年代末から2000年初めまでの時期を中心に考察を展開しているが、その後紆余曲折を経て、現在もまだ設置の目処は立っていない。いうまでもなく、このクメールルージュ裁判設置問題の迷走の背景には、何よりも政権崩壊から20年という長い時間の経過がある。

評者にはここでクメールルージュ裁判の是非を論じる関心はない。しかしこの混乱をめぐる問題の構図からは、現代カンボジア社会と向かいあう研究者として留意すべきひとつの注意点を、比喩的に省察することができると思う。つまり、ある事象が問題として論じられるようになるまでには状況の変化を待たねばならなかったが、問題となるべき事象はそれ以前から存在していたという点である。当然、カンボジアには、我々外部者によって「過去から立ち現れる」と問題化される以前から、生きる人間の営みが存在していた。

本書に集められた各論はもちろん、再開されたカンボジア研究の最近10年間の到達点を把握するうえで、熟読に値する。評者としては中でも、第2章、第4章から第6章、そして第7章の各論からはそれぞれ刺激を受けた。長期的な停滞を脱したばかりのカンボジア社会研究には、まず多様な側面からの実証的な検討が求められる。しかしそれはあくまで第一のステップであり、先にはより広い時間的空間的な視野に立つ考察が待たれる。

引用文献

Chandler, David. 1999. *Voices from S-21: Terror and History in Pol Pot's Secret Prison*. Berkeley:

University of California Press (デーヴィッド・チャンドラー. 2002. 『ポル・ポト 死の監獄 S21』山田 寛訳. 白揚社).

Hinton, Alexander, ed. 2002. *Annihilating Difference: The Anthropology of Genocide*. Berkeley: University of California Press.

(小林 知, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Dorothy L. Hodgson. *Rethinking Pastoralism in Africa: Gender, Culture and the Myth of the Patriarchal Pastoralist*. Oxford: James Currey, 2000, 272p.

1970年代に「女性の人類学」の立場から人類学の男性中心主義が批判されてから約30年が経過したが、アフリカの牧畜社会を対象として女性の社会的役割を再評価する試みが始まったのは比較的近年のことである。この遅れは牧畜社会が民族誌上において男性中心的な社会の典型として描かれてきたことと無関係ではないだろう。たとえばポール・スペンサーはアフリカ牧畜社会の古典的研究において、ケニアのサンプル社会では女性は結婚の際に家畜と交換可能な「資源」であり、家畜と女性に関する権利を男性の年長者が管理することで若者に対して支配を及ぼす「長老制」こそが、社会の統合原理であると分析した [Spencer 1965]。いうまでもなく、そこには主体的な意思決定者として女性を捉える視点は欠落していた。

1980年代のなかばからは女性の活動に着

目した研究も徐々に発表されたが、その多くは労働力としての女性が家畜の生産活動にいかに関与しているのかをテーマとしており、それ以外の活動への目配りは希薄であった [Dahl 1987; Curry 1996]. このような研究傾向の背景には、男性が世帯レベルを越えた「公的」な領域で「政治的」な活動をおこなうのに対して、女性は「家内」領域に閉じこもり育児をふくめた世帯の生計維持活動にいそむという図式的な二分法の存在をみてとることができよう。

本書の視座は、まずそのような二分法に懐疑を抱くところにある。実際に、この二分法が西洋で歴史的にはぐくまれた家族や世帯概念に依拠したものであることはすでに指摘されており [Yanagisako 1979], それぞれの社会で男女の活動領域がどのように形成され範疇化されているのかは興味深い研究テーマとなつてこよう。本書でも女性の生産活動への貢献はとり扱われているが、重点は従来排他的に男性の領域であるとされてきた「公的・政治的」な活動に、女性が積極的に関与している姿を描き出すことにおかれている。

編者のドロシー・L・ホジソンによる序論「家父長的な牧畜民のジェンダー、文化、神話」は、「家父長制」という概念に依拠して従来の研究を指弾しつつ、本書全体の目的を提示している。これまでアフリカの牧畜社会は「家父長的」な社会、つまり「男性が女性に対して政治的・経済的・社会的・文化的な支配を行使するジェンダー関係の一形態」(p. 5) をつよく有する社会として描かれてきた。ホジソンは、このような表象は民族誌上にお

いて生成された「神話」でしかないと批判する。牧畜社会の研究者の多くは男性であり、彼らは主要な情報提供者である現地の男性が語った周縁的な女性の姿を「客観的事実」として生産し続けてきたのである。それに対して本書は、女性の活動や地位を直接観察や女性自身の語りから明らかにすることによって、そのような「神話」を再考し、より社会の現実に即したジェンダー関係を描き出すものとして位置づけられる。本書の執筆者（共著者も含む）全 16 人のうち女性が実に 14 人を占めていることは、このような本書の位置づけを何よりも明確に示していよう。

ホジソンは、そのような作業を試みる際には、現在のジェンダー関係を外部世界との歴史的な相互作用の過程で構築されてきたものとして捉えることが必要であると強調する。アフリカの牧畜社会は従来、外部世界に固く門戸を閉ざした歴史なき社会として描かれることがあまりにも多かった。しかし古くはイスラム教への改宗にはじまり、国家の政治システムへの包摂、資本主義経済への接合、海外 NGO らによる開発プロジェクトなどが、当該社会のジェンダー関係に影響を与え続けてきたという事実を目をつぶることはもはや許されない。従来の研究において不可視化されてきた女性を描く作業は、同時に時間的・空間的な分析枠組みの拡大と直結する必要があると、ホジソンは指摘しているのである。

本書は序論に続いて、4 部 11 章により構成されている。以下では各章の内容をみていくことにしよう。第 1 部は「文化をつくる」と題されており第 1～3 章からなる。これまで

牧畜社会の「文化」といえば「ウシ文化複合 (cattle complex)」ということばに示されるように家畜にまつわる事象ばかりがとりあげられてきたが、ここでは女性が家畜以外の多様な物質文化を生産・利用することで、集団アイデンティティの創出や儀礼の執行に重要な役割を果たしていることを示すのに成功している。バーバラ・ピアンコによる第1章「ケニアの西部ボコットにおけるジェンダーと物質文化」では、女性が第1子の出産後に身につける牛皮で作られたベルトの利用方法とその象徴的意味の分析から、また第2章のコリン・クラッツとドナ・ピドによる「マーサイとオキエクのビーズ細工におけるジェンダー、エスニシティ、社会的美学」では、東アフリカ牧畜民のもっとも重要な身体装飾品であるビーズ細工の製作や利用方法の詳細な記述から、女性がクラン間・民族間の差異の形成に直接・間接に深く関与していることが示される。

第3章、アンドリュー・B・スミスとリタ・ウェブリーによる「南部アフリカにおけるコイコイの女性と男性」では、ふたつの後期石器時代の遺跡から発掘された物質の多くが女性と象徴的につよく結びついたものであったことが推測され、かつて女性が多くの儀礼で中心的な役割を果たしていたことが論じられる。

第4～6章により構成される第2部「権力の諸領域」では、本稿の冒頭であげたスペンサーの研究に代表される「牧畜社会においては男性のみが政治的な意思決定や紛争解決の能力をもつ」という考え方に対する挑戦が

おこなわれている。ドロシー・L・ホジソンによる第4章「タンガニーカのマーサイにおける牧畜、家父長制、歴史：1890-1940」は、マーサイ社会の「家父長的」な構造が植民地政府の介入によって歴史的に生成されてきた過程を、古文書資料をもちいながら再構成している。19世紀末までのマーサイ社会では、男女の活動領域は明確に区分されておらず、両者の関係は平等的であった。しかし第一次大戦後、イギリス植民地政府が男性を排他的に政治的主体かつ家畜所有者と規定したために、女性はそれまでに保持していた権利を剥奪され家内領域に閉じ込められることとなった。本章の内容は本書所収の論文中最も注目すべきものであるが、植民地期以前の男女間関係をほぼドイツ人の軍人による一冊の著作のみにもとづいて「自律性をもちながら相互に尊敬しあう」関係であったとしている点にはやや疑問が残る。

歴史的な過程で女性が周縁化されてきたことを示した第4章に対して、アシャ・ハギ・エルミ、デカ・イブラヒム、ジャニス・ジェナーによる第5章「ソマリ社会の平和生成における女性の役割」は、現代の女性が積極的に「政治的」な活動に参加している事例を扱っている。父系クラン間の紛争が社会の不安定要因となっているソマリ社会において、女性はクラン間の交渉媒介役として紛争の解決に重要な役割を果たしてきたが、ソマリア内戦やケニアのワジル県での紛争といった今日の状況においても、女性は主体的に組織を創設してクランや政府の実力者と直接交渉を重ね、コミュニティに平和をもたらすための

活動をおこなっている。著者たち自身の経験にもとづいて書かれた本章の事例は、女性を紛争の被害者として描くことに専心してきた西側のメディアや研究者の安易な視線に警鐘を鳴らすものとなっている。

シアン・サリヴァンによる第6章「かつてのナミビア人『ホームランド』におけるジェンダー、民族誌的神話、コミュニティを基盤とした保全」では、ダマラ社会において女性が豊かな民俗植物学的知識を有しているにもかかわらず、近年に政府が推進しているコミュニティを基盤とした自然資源管理(CBNRM)の担い手からは排除されていることが問題視され、その原因として従来の民族誌が男性の活動を偏向的にとりあげてきたことが指摘されている。

第7～8章からなる第3部の「社会関係」では、女性を中心に形成される社会関係に焦点をあてることで、エヴァンス＝プリチャードによるヌエル社会の研究以来、今日まで受け入れられてきた牧畜社会における父系原理の重要性を再検討することを促す。両章とも既存の分析概念を安易にもちいるのではなく、当該社会の多義的な概念を精緻に分析することでその目的を達している。

ヴィグディス・ブロッホ＝デューによる第7章「家と家畜群の生殖力：牧畜民トゥルカナにおける親族とジェンダーの生産」では、ケニア北西部のトゥルカナ社会において、夫とその妻たちによって構成される男性中心的な世帯と、夫の死後にその妻と子供たちによって構成される女性中心的な世帯が、世帯の発展サイクルにおいて交互に現れるもので

あることが示され、父系原理の重要性のみを強調する従来の議論は、サイクルの一段階を恣意的に切り取ったものでしかないことが指摘される。

第8章の「身分の高い母親：トゥアレグ・コミュニティにおけるジェンダー、加齢、出産後の経験」では、スーザン・ラスムッセンがニジェールのトゥアレグ社会における民俗生殖論的な言説の検討をとおして、閉経による出産能力の消失という生物学的な現象が文化的な豊饒性を獲得する契機として評価され、閉経後の女性が多くの場合でつよい社会的影響力を行使していることを示す。そして加齢や閉経を否定的に評価する西洋中心主義的な言説を相対化するために、広く比較研究をおこなう必要性を説いている。

最後の3つの章からなる第4部「開発と近代を切り抜ける」では、近年の急激な社会変化がもたらす諸困難に直面しつつ、さまざまな営みをおして新たな生活を切り開いている女性の姿が描かれる。ソルベグ・ブルとキャサリン・ホームウッドによる第9章「ブルキナファソ北部におけるフラニ女性のミルク販売」では、93人の女性のミルク販売活動の実態と各女性をとりまく社会的・経済的要因との関連が定量的に明らかにされている。

第10章「北ケニアにおける開発イデオロギーとサンプル女性のローカルノレッジ」ではピリンダ・ストレイトが、ドイツ政府の援助による開発プロジェクトによって雇用労働や交易活動への参入機会を提供されたことで、女性が世帯の生計維持に中心的な役割を

果たすようになったこと、またその過程でもちこまれた「開発」という概念をサンプル流に再解釈することで人びとが資本主義経済への適応をはかっていることを指摘している。

第 11 章のマリオ・I・アグイラーによる「ある牧畜民の街における牧畜の崩壊と文化的連続性」は、1930 年代以降に男性のイスラム教への改宗が進んだケニア北部のボラナ社会においては、今日まで在来の信仰を保持してきた女性が多く、多くの儀礼で執行者の立場を占め、またその場で「ボラナであること」の意味を再解釈しながら子供たちに伝えていることが示される。

以上みてきたとおり本書の対象となった地域は東部・西部・南部アフリカに及び、またとりあげられた内容も、考古学資料の解析から開発プロジェクトによる影響まで多岐にわたっている。そのため個々の事例が興味深いものとなっている一方で、各章や各部間の関連は必ずしも明確ではなく、雑多な事例を「ジェンダー」というただひとつの共通項によって論文集にまとめあげたという印象も受ける。本書の目的のひとつとして編者は人類学理論一般やアフリカ地域研究への貢献をあげているが、寄稿者にどれだけそのような問題意識が伝わっていたのか、やや疑問が残ることも確かである。また編者自身にも、従来「家父長的」な社会として描かれてきたという点を強調するあまりに、編者自身が「アフリカ牧畜社会」をひとくくりのものとして扱う傾向におちいっており、社会間・地域間の政治構造の差異や歴史的背景に対する目配りはあまりなされていない。たとえば第 3 部に

収められているふたつの章は、それぞれ無頭制的 (acephalous) な政治体系をもつ東アフリカと階層化が発達した西アフリカの牧畜社会を対象としているが、牧畜という共通の生業様式を媒介項とすることによって両社会における女性の地位には何らかの類似点が見出せるのかという疑問が編者によって提起されることはない

もっとも本書の各章で示される事例はそれぞれがユニークなものであり、従来の「家父長的」な牧畜社会像を一新するとまではいえないが、少なくとも「神話」を再考するという編者が序論で示した目的は十分に達成されている。ここで示された多様な事例に喚起されて新たな研究が蓄積していくことで、上に述べたような比較研究が今後に進められることが期待される。その意味で本書は、アフリカ牧畜社会におけるジェンダー研究の出発点であると位置づけることができよう。

引用文献

- Curry, John. ed. 1996. Gender and Livestock in African Production Systems, *Human Ecology* 24 (2): Special issue.
- Dahl, Gudrun. ed. 1987. Women in Pastoral Production, *Ethnos* 52 (1-2): Special issue.
- Spencer, Paul. 1965. *The Samburu: A Study of Gerontocracy in a Nomadic Tribe*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Yanagisako, Sylvia. 1979. Family and Household: The Analysis of Domestic Groups, *Annual Review of Anthropology* 8: 161-205.
- (佐川 徹, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)